

2022年9月15日 NO1604

コロナ禍で奮闘する



医療・介護現場の実態告発

京都医労連記者会見・20220914

京都医労連は9月14日(水)14:00~府政記者クラブにて記者会見を実施。民間病院や精神病院で働く 看護師、コロナ陽性患者が「留め置き」された特養ではたらく介護職員、そしてコロナ「留め置き」で家族 を亡くした看護師さんが患者家族の立場で訴えました。

記者会見には、KBS京都、京都新聞、産経新聞、朝日新聞、毎日新聞、共同通信、時事通信社、読売新聞、赤旗、京都民報、10社が出席。当日、17:35のKBS京都「きょうとDays」で放映されました。

医療や介護現場の労働者、そして患者家族の立場からの悲痛な訴え!

●民間病院で働く看護師

家族の感染が増え、子育て世代の職員が複数同時で休む、常に職員の誰かが長期間休むという状況。夜勤を組むのに、日勤は少ない人数となっています。「休憩時間はご飯を食べるだけで終わる。」「夜勤回数が増えている。」「帰っても疲れがとれない」との声が寄せられ、安全・安心の医療提供体制のためには、人員配置を手厚くする必要があります。

●精神病棟で働く看護師

今年入職した新人看護師も夜勤のオリエンテーションを受ける余裕もなく、夜勤をせざるを得ない程人員不足です。 認知症の患者さんはコロナへの理解が難しく、対応する看護師の防護具を取られそうになる事もありました。自室内にトイレがない患者さんは、トイレ誘導のたびに自室まで戻っていただくのが大変でした。

●特養でコロナ対応した介護職員

コロナで亡くなった利用者さんは、チャック付き袋に入れてくださいと。理由はコロナから周りを守るため。亡くなってまでこんな仕打ちに合うのか。すごく無念。普段の生活でチャック付き袋を見るのが怖くなって、使えなくなった。

医療的処置があまり出来ない特養でコロナ患者を看るには限界があります。コロナに感染した施設利用者 が全員入院できるような世の中にしてください。

●「留め置き」でお父さんをなくした看護師

父親が6月に脳梗塞で入院して、その後病院でクラスター発生し、コロナに感染。転院することになりましたが、転移先がみつからないまま、数日後に亡くなりました。「10月には家に帰ろう」と語っていた矢先でした。病棟のスタッフの皆さんには、病院の医療機能の限界によって、目の前の患者を治療出来ない無力

感の中、できる限りの治療とケアをしていただき、大変感謝しています。

国や自治体によって、コロナ 対応のできる病床がちゃんと確 保されていれば、父は命を落と さなかったのでは無いかと思う と無念でなりません。国や自治 体に、コロナ医療体制の抜本的 な強化を求めます。



====新型コロナ感染症に関する職場の緊急実態アンケート====

8月24日~31日の1週間で62件≪病院38件、診療所10件、訪問看護5件、介護関係(デイサービス・ヘルパー・老健等)4件、薬局2件、健診2件、不明1件≫を集約。

1 職場で起こっている問題や特徴

(1) 患者・利用者への影響

「電話の問い合わせが多くなった」「外来の待ち時間が増えた」「入院患者の受け入れを中止した」「手術や検査を延期した」「診療制限」「面会制限」「救急受け入れを4割断った」「50⁴-離れたところから救急車が来た」「十分な看護・介護が提供できない」「リハビリが受けられず、ADLが低下した」「認知症の進行が心配だ」「入浴回数が減った」「昼の食事介助が16:00になった」「褥瘡が多発した」「転院先が見つからずに死亡」

(2) 労働者への影響

「慢性的な人手不足がさらに圧迫」「陽性や家族の濃厚接触で職員が休むと人員不足」「時間外増加の長時間勤務」「暑い中での防護服を着たり、脱いだり、汗だくで具合も悪くなる」「4人夜勤→3人夜勤、夜勤回数が増えたり、応援体制は日常化し、綱渡りの勤務」「心も身体もストレスフル」「急な勤務交替」「休憩時間がとれない」「医師は昼食を食べながら陽性者登録をする」「慣れない職場へ

を公表。もともと ことが必要だと訴えま 充を国・自治体が行う 府内北部の公立病院 職員の男性は一4月に 事故がなくてよかった ね』という日々が続い

契約社員の岩本久芳さ一決が14日、東京高裁で

日本通運川崎支店の

東京高裁

ん(42)が、同社に対

し、人権を守れる医療 康への深刻な影響を紹 員の声と、ケア不足に ってしまう」などの職 につかせるなど『1日

坂田政春書記長が、

記者会見し、コロナ

3分の1ほどの休職者 指導ができぬまま夜動 ったく違う。 7波では 染の様相が第6波とま 廣瀬昇さん(54)は「感

コロナ禍で言

通雇い止め

控訴棄却

無期転換逃れの不当判決

できず施設内で対応。 クのある人以外は入院 ハビリ入院中の父が8 1人が亡くなっ

京都医労連第7波の実態告発

り勤

転院先が見つからず死

います」と話しまし いがずっと心に残っ のではないかという思 去。「コロナが始ま 院できていれば救え 後に見た父の顔と、 十分に強化しない。 し2年以上たつのに

のヘルプの緊張、ストレス」「帰っても疲れが取れず、子ど もに当たり散らしていた」「普段から精神科は少ないスタッ フでみており、スタッフが感染するとさらに人員不足」「コ 口ナ陽性者への訪問もあり、感染防御に労力・神経を使う」 「電話先での暴言、脅しの対応がつらい」「陽性結果を伝え ると仕事は簡単に休めないから陰性にしろと暴言し

困っていること

「コロナで感染しても労災扱いにされない、家族感染で出勤停 止の業務命令なのに、有休を使われる 有給がなくなって、一 時金が減らないか不安し「コロナによる電話相談の対応で業務 圧迫」「救急外来はコロナ陽性者に直接対応した職員のみしか 危険手当3,000円は支給されない」

国・自治体への要求

「医療・介護従事者全般への処遇改善」「手当など、きっちり 補償を」「医療従事者と世間とのギャップが大きい、正しい知 識の発信を」「保健所の体制強化」「先進国並みの医療スタッ フの配置を」

場実態を届けた京都府要

9月2日(金)、京都民医労立花委員長と医労連 坂田書記長で京都府要請を行いました。要請内容 は、①必要な医療が行きわたる体制の確保、②感 染拡大を抑制する体制の強化(PCR検査の抜本的 拡充等)、③感染爆発を抑制する対策の具体化(感染拡大を減らす行動変容を促す対策、新型コロ ナ感染法上の位置づけを2類相当から5類に変更の 中止、全数届出と原則入院の継続等)です。現場 の実態の声を訴え、アンケートのまとめを渡しま した。京都府の職員は、「現場の労働者の方の話 を直接聞く機会が少ないので、貴重な機会となっ



た。」「東山サナトリウム病院の入院待機ステーションは、数床ですが、皆さんをサポートするために稼働し ていきたい」「2類相当から5類への変更は、公費負担の課題など単純でない。全数把握は、把握からはじかれ た方の健康把握が可能なのかと言う課題がクリアしなければ、見直しはできない。9月に出る国のパッケージを 見て判断したい」「『行動制限』について理解はできるが、エビデンスに基づいて判断したい」と。